



Title	オンライン授業でのフィリピン語授業におけるインターネット動画の活用事例
Author(s)	宮脇, 聡史
Citation	外国語教育のフロンティア. 2021, 4, p. 121-131
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/79366">https://doi.org/10.18910/79366</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# オンライン授業でのフィリピン語授業における インターネット動画の活用事例

## Case Study of the Usage of Internet Movie Clips in an Online Filipino Language Class

宮脇 聡史

### Abstract

This essay introduces a case study on an intermediate level Filipino language class and how movie clips on the internet, typically found in official YouTube websites of mass media, artists, civil organizations, etc, can be effectively utilized in the context of online classes in the COVID-19 pandemic situation.

The essay begins with general background on certain problematic aspects of finding appropriate practical educational materials for those students who have already finished basic course on the grammar, in the present context of the curriculum in School of Foreign Studies, Osaka University. It then explains the unique difficulty the learners of Filipino language often face in relation to the problematic local issues related to the Filipino language as the national language along with English as an official language which is also the globally most competitive lingua franca. It is followed by the general situation online about how more and more attractive materials are recently beginning to be accessible for that specific purpose, accelerated by the COVID situation.

The essay then explains how the author led the suddenly introduced online based Filipino class by making use of these online YouTube movies and demonstrates how it can be very effective in the context of online learning.

キーワード：新型コロナウイルス、YouTube、オンライン授業

### はじめに

2020年初頭の新型コロナウイルスの感染拡大とそれに伴う対策は社会全般に多大な影響を及ぼし、大学の活動、特に授業もその大きな影響を受けてきた。

とりわけ感染への対策への模索の初期段階においては、多人数での集まりを避ける社会的努力の一環として、大学は率先して授業をオンラインに移行させる措置をとった。大阪大学外国語学部フィリピン語専攻（以下フィリピン語専攻）も、特に3月以降現在（11月）に至るまで、でオンラインでの学生対応と授業の取り組みについて、大学からの方針の伝

達を踏まえつつ、話し合いを重ねながら試行錯誤してきた。

フィリピン語専攻は4名の常勤の日本人教員と1名の特任外国人教員で構成されている。フィリピン語の教育に関しては、2020年度は専門科目である1年生、2年生の実習各5科目は全員がそれぞれ1科目ずつ担当し、3、4年生向けのフィリピン語の授業も常勤のうち3名及び特任が分担して担当している。1、2年生の講義で一通りの文法、基本的な語法や語彙を学び、3、4年生になると文献や音声、映像資料などを活用した演習へと移行する。

ここで問題となったことの一つは教材の提供である。特に3、4年生の演習授業は実際的な資料を用いたものとなるため、そうした資料を教室ではなくオンラインでどのように提供し、どのように取り扱うかが課題となる。

本稿では、こうした経緯の中でインターネット上の資料、特に動画資料をどういう観点から取捨選択し、オンラインの授業にどのように組み込み、活用したかを、その成果と課題を踏まえつつ紹介したい。

## 1. 基礎教育から実践教材への移行における課題

### 1.1. フィリピン語専攻におけるフィリピン語カリキュラムにおける基礎から実習への移行段階

フィリピン語専攻では2012年以降、2019年3月まで教員を務められた大上正直教授による『フィリピノ語文法入門』及び『世界の言語 フィリピン語』の二冊を大上と宮脇が分担し、最初の1年半で基本的な文法、語法全体を教えた上で、実践的な教材を導入してきた。また非常勤教員による1時間の授業、フィリピン人特任教員（現在はエドガー・サマール講師）による2時間の授業は基礎を確認しつつ、実践的な要素のある授業を行ってきた。

2019年に大上の後任として矢元貴美助教が入り、また2020年には非常勤教員の解消等と合わせて、宮原暁教授、白石奈津子助教が加わり、日本人4名、フィリピン人1名の体制となった。これにより各教員が1時間ずつ担当することなど、授業分担の形態は変化したものの、教授内容の大枠については、最初の1年半で基礎を固め、残りの半年でそれを復習しつつ実習的な課題を導入し、3年次から実習へと移行するという形を継承している。

### 1.2. 演習への移行をめぐる一般的な問題とフィリピン語固有の事情

こうした中で、特に3、4年時向けの授業の内容、教材、及び授業の提供方法は長年の課題であった。その背景にあるのは、一般的な事情だけでなく、フィリピン語教育がフィリピンにおいておかれている位置の問題も絡んでいる。

一般的な問題は明らかである。たとえ文法や語彙に関して基本的な事柄の履修を終えたとしても、当該言語が国語ないし母語として実際に用いられている現場での言語使用の実

例にいきなり取り組むのは容易ではないし、そういう状況でのカリキュラムの作成、またその遂行にも工夫が不可欠となる。

大阪大学外国語学部のカリキュラムでは、3、4年生の授業は選択必修となっており、学生にとって魅力的なのは実践性が強く、なおかつ難しすぎない、という緊張をはらんだカリキュラムではないかと考えられるし、語学の上達、及び当該言語が使用されている地域や人々に対する理解を深めるためにも、そうした教材がとても重要となるだろう。

恐らく、比較的学習者の多い言語の場合は、そのような中級レベルの語学教材も豊富であると考えられるが、問題はそうではないケースである。その場合、語学教材として加工されていない現場性の高い実践的なテキストでありつつ、外国人学習者の理解を助ける要素が盛り込まれているような素材を探し出し授業に導入することが試みられる場合が多いのではないかと。筆者が2012年にフィリピン語専攻に就任して以来、この適切な教材をどう設定するか、という点が、最も大きな課題のひとつであった。

ここにはフィリピン語をめぐる事情も絡む。例えば日本国内には在留フィリピン人およびその子弟の数が多く、教育の現場や行政において、サービスの補助言語としてフィリピン語（あるいはそのもととなるタガログ語）の翻訳資料が多く発行されてきた。また子弟向けの母語教育プログラムにおける教材も開発されてきた。こうした日本におけるフィリピン人向けの教材や資料は実践性がありながら難易度が制限されており、かつ日本における生活に関するものであるため、日本人学習者にとっては連想が働きやすい。そのためこれらが実践教材として有用である点は認識されてきたし、フィリピン語専攻でもかつては非常勤教員によって、現在は常勤の矢元などによって活用されている。但し、これは高度に日本の文脈に依るため、実践教材としては、やはりフィリピンにおいて用いられているものへの接続もまた重要であり、こうした教材のみに頼るわけにはいかないことも明らかであろう。

しかし、ここにも大きな課題がある。フィリピンにおいて、専門的な議論や公的な問題の多くは、今なお英語によるコミュニケーションが支配的であり、フィリピン人以外の外国人による、中級程度以上のフィリピン語学習というものの存在がほとんど想定されていない、ということがある。その背景には、公用語である英語が世界的に重要な言語であり、フィリピンにおいてもその重要性はむしろ増していることがある。またフィリピン語およびそのもととなっているタガログ語の母語人口はなお4割程度とされており、話者人口が国民の9割を超えるとされるその普及とは裏腹に、これをフィリピンにおける言語の中心に据えることについて、なお大きな抵抗があることも無視できない。初等教育における母語教育の重要性の強調、英語教育の重要性の強調のはざまに、フィリピン語教育が十分に拡充されているとはいえない、という現状もある。

そうした背景の中で筆者は、過去にフィリピン本国における小学校低学年向けのフィリ

ピン語（国語）や社会科の教科書を用いるという試みを行ってきた。しかし、実際に読んでみると、内容はどうしても小学校の教科書、という幼い雰囲気が強く、また時事的な性格もあまり強いとは言えないため、今一つ学習者の強い関心を惹起するものとはなりにくい。またフィリピン語およびそのレベルについての標準化が十分になされていないためか、語彙や表現の難易度のレベルが明らかにまちまちで、なおかつ子どもたちの日常的な言語能力とも今一つうまくマッチしていないことが疑われるような難解な語彙も登場する。フィリピンの教科書をめぐる様々の汚職やその質に関する繰り返される疑義も合わせると、これを無批判に使い続けることには大きな不安が残った。

そのような中で、次第に有用性が高いのでは、と筆者が注目するようになったのが、オンラインのマスメディアによる記事や動画である。

## 2. 増大する身近な教材とその特徴

### 2.1. 新聞

筆者が当初授業での活用を模索したのは、フィリピンのタガログ語の新聞記事であった。新聞記事の一番のメリットは、エリート向けの英字紙と違い、フィリピン語の新聞は庶民向けであり、非タガログ語圏出身の読者も想定するため、比較的平易な書き方がされていることである、と筆者は考えた。但し、庶民的である分だけ俗語が増えたり、また情報の信用性に問題がある可能性も懸念された。

筆者はフィリピンの英字紙三番手の *Philippine Star* の系列で、タガログ語（タブロイド）紙の中では二番手と言われる *Pilipino Star Ngayon* の、特に最近の重要な出来事の簡潔な紹介を含むことが多い社説記事を中心に扱うことで、学生に取り組みやすく、信頼性もあり、かつ先端のニュースに触れてもらうことができる、と考え、数年前から2年次後半以降の授業で導入するようになった。

主要ニュースであれば英字紙で、場合によっては日本語の記事で内容のあらましをあらかじめある程度知ってから取り組むことも可能なので、フォーマルだが比較的理解しやすい記事のある程度特定して提供する道が開かれた、と筆者は考えている。

ちなみに、近年ではフィリピン語で執筆された論文なども次第に現れてきているが、語学授業の教材としての活用には二つ問題がある。一つは極めてフォーマルなフィリピン語で書かれている場合が多く、この場合ネイティブでも読み進めるのに苦勞するような文章となるため、学部レベルでの教育にはなじみにくい。以前修士課程の授業においてフィリピン語で書かれた研究書を扱ったことがあるが、非常に難解であり、文学などの深いフィリピン語の読解になじんでいる少数の人たちを除いて、フィリピン人にとっても読み慣れないものであることを実感した。知人である著者本人の話では、フィリピン人の関係者にその本を贈呈するとたいていは「ありがたいけれど、英訳が出たら読みます」と言われて

しまうという。またそこから想像されるとおり、文学系や語学系など一部の分野を除いて、フィリピン語による学術書はなお極めて少なく、主流とはいえない。

## b. テレビ、ラジオ番組

フィリピン語のインターネット・メディア配信は、テレビやラジオが積極的に進めてきた。ラジオは様々なアプリを通してほとんどの番組がライブでオンライン視聴できるようになり、一部はさらに動画をつけてYouTubeやFacebookで視聴可能になっている。テレビ局も多くがライブ配信後オンデマンドでも視聴が可能になっている。

オンデマンドは日々の番組全体やそのダイジェスト版、更にはニュースごとに分割された短い動画までアップされており、急速に教材として活用しやすくなっている。映像の場合は、読まれているニュースに関する出来事や場合によっては字幕が映し出され、またニュースのあらまははキャプションの文字情報で明示されていることも多い。

YouTubeの場合は動画の速度の調整も可能なため、速度を遅くすることで聞き取りの訓練も可能となるのも大きなメリットと言える。

最近ではアップされる番組の内容も社会問題に関するドキュメンタリーから娯楽まで幅広く、また数分でニュース解説をする動画なども、時には全編字幕付きでアップされるケースも増えてきている。あるいは英訳の字幕がつく場合もあるので、この場合は一定の英語力を前提として入学してきた1年生向けの活用にも開かれてくる。

## 2.2 芸能

また、学生の関心の高い芸能系のオンライン発信も増大している。ポップスに関しては、現在ではほとんどすべての人気曲のPVやライブ動画クリップが全編丸ごと音楽家個人、あるいはプロダクションや放送局の公式サイトに掲載されるようになった。音楽専門のラジオ局がスタジオ収録した動画をそのまま載せることも増えてきた。またドラマやバラエティ番組についても、多くの人気番組がYouTubeやFacebookを通して視聴できるようになっている。

同時に、これらの素材、特にポップスを授業に取り入れるようになったが、メリットとともに、難しい面も明らかになっていった。メリットとしては、多くの曲はドラマの要素のあるPVとなっており、音楽だけでなく、映像を通してフィリピン社会や文化の様々な様相を体感できるという点が特にあげられる。歌は会話と比べればかなりゆっくりと歌われるので、音を把握しやすいことも少なくないというメリットもある（もちろん崩して歌われる場合もあるので一概には言えない）。また元々のPVとは別に歌詞のついた動画もアップされているケースが非常に多く、そうでない場合も検索エンジンで調べれば簡単に歌詞紹介サイトにたどり着ける。曲によっては英訳が付けられている場合もあり、内容がある

程度理解した上で取り組めるメリットもある。

他方でデメリットとしては、歌の歌詞には、日常の語法文法と異なる独特の表現があり、個々の単語が分かるのに、全体をうまくつなげない、というようなレベルでの戸惑いがしばしばみられる。接辞やマーカーの省略、同じ言葉の反復を避けるための多彩な単語での言い換え、あえて意味をあいまいにする表現、リズムと韻など、初級の授業ではあまり考えなかったものによって、学習者は何重にも幻惑される。もちろんこれは、謎解きのように授業で解き明かしていくことができるので、うまく教えることでメリットにもなるだろう。

もちろん映画やドラマ、バラエティはどうしてもハードルが高くなる。時にセリフや会話は難しく、スラングが飛び交い、また深い文脈が絡むことも多い。ただ、こうしたものによって得られる社会や文化に対する理解は立体的なものになる可能性があり、魅力的な教材であり続ける。その活用は大きな挑戦があるが、学生と一緒に有用性を高めるための努力をする価値はなお大きいと言える。

### 2.3. 宗教系メディア

フィリピン語の普及度が高まる中で、筆者の研究対象であるカトリック教会系でも、フィリピン語による媒体、発信も増えてきている。またプロテスタント系の場合はカトリック教会以上にメディアに敏感な傾向もあり、またフィリピン語をはじめとするフィリピン諸語による発信も活発である。カトリック教会の場合、例えば代表的なカトリックメディアの老舗の一つ「ラジオ・ベリタス」は、最近はニュース記事をほぼすべてフィリピン語で配信しており、並行して番組もオンライン放送及びFacebookなどによる動画配信のかたちでおこなうようになった。プロテスタントの代表的なラジオ局FEBCもFacebookを活用し、動画付きのラジオ番組を積極的に配信している。

キリスト教会では、長年英語や西洋文化に過剰に傾斜してきたことへの反省が進み、その中で、現地語の聖書翻訳などと並行して、カジュアルな現地語による書籍の出版も進んでいる。特にプロテスタント福音派の出版社OMF Literatureによる一連のタグリッシュ(タガログ語と英語のコードスイッチが起こる言語)での多くの出版物は先駆的な試みと言える。これらは青年たちの日常会話に近い表現が用いられている。筆者はこのシリーズの中から一冊を授業で用いたことがある。ただタグリッシュにおける英語とタガログ語の混合は、両言語に対する一定水準の理解を前提とした高度な遊びのようなところがあり、教育用の教材としての効果は議論の余地があるというのが実感であった。

キリスト教界ではさらに進んで、このタグリッシュによる聖書翻訳のプロジェクトが、カトリック、プロテスタント諸派の協力で進められている。すでに新約聖書(New Testament Pinoy Version)が出版され、大きな反響を呼んだ。この聖書の翻訳も一度授業に導入した。それは特に、フィリピンではキリスト教の社会的影響力が大きく、地域理解に

益する、という観点や、聖書は既に日本語にも翻訳されており、大筋を理解した状態でフィリピンの言葉ではどう訳されているか考えることができるメリットも考えに入れてであった。但し、教材として学生と読み進める中で、このテキストが一方で青年が日常に使っている表現やコードスイッチの仕方を積極的に取り込んではいないが、他方で翻訳のためにその自在さに一定の標準化による制約を課していることが分かってきた。つまりこれは自然に用いられているタグリッシュではなく、翻訳のために一定のルールの中に閉じ込められた「標準化されたタグリッシュ」であった。そのため、それは一方でそうした言語の研究の成果を知るという点では興味深くても、学生がいわば「生の」言語使用に触れる、という点では問題があるという結果となった。

なお、宗教系の番組と言っても、黙想や聖書研究、メッセージ、讃美歌といった狭義の宗教にとどまらず、子育て、海外出稼ぎ、医療、一般ニュースなども充実していることが多い。そして番組ごとにオンデマンド再生が可能になっていたりもする。宗教番組の場合、内容を強調するため丁寧な字幕がついている場合も多く、音声教材、映像教材ではあるが、同時にテキストをだいたい正確に追えるような支援となっている。学生の関心や授業の目的と適切に結びつけることができれば、有用な教材を探し出すことができる、と期待される。

### 3. オンライン教材活用の実例：フィリピン語Ⅲ 2020年春夏学期授業

以上のように、近年は中級レベルの語学学習教材の不足を補う教材としての可能性を秘めた、しかも一定の信頼性のある素材が、急速にそろいつつある。そうした中で、2020年度の授業が、新型コロナウイルス感染拡大の中で、全面オンラインで開始となった。その結果、それではオンライン授業で、それらのオンライン教材をどう活用するか、という新しい問題と取り組むこととなった。

#### 3.1. 追い風となった出来事

新型コロナウイルス感染拡大による行動の制限は、大学教育に多くの制約を課すこととなったが、メリットもあった。一つは、外出に制限が加えられたフィリピン本国でも、オンラインによる多様なコンテンツの配信が加速することになったということが挙げられる。これは、主要テレビ局の一つABS-CBNが大統領に敵視されたため放送権の認可が更新されず、番組がほぼ全面的にYouTubeなどによる動画配信に移行したという出来事と合わせ、オンラインによるフィリピン語やタグリッシュのコンテンツの充実、多様化につながった。

### 3.2. 授業の構成

オンライン授業は急遽始まることとなり、教員サイドには経験が乏しく、やっとZoom会議を使えるようになった、という有様であった。他方学生の方はオンラインのライブ授業という時に、パケット量や接続環境をめぐる問題が指摘されていた。大阪大学はこの点に関する支援等を迅速に整備してはいたものの、個別の学生たちに対し、一定の配慮が必要であった。

他方でフィリピン語専攻の教員間の話し合いで、授業の中で双方向的なコミュニケーションが不可欠であることも確認された。ライブ授業にせよオンデマンドにせよ、授業の効果を高めることと合わせ、コミュニケーションを充実させることで、学生たちの孤立を少しでも緩和することも目指された。

そうしたことを鑑みて、3,4年生対象の専門語学の演習であるフィリピン語Ⅲの授業は、10-20分程度のZoom会議で授業のあらまし及び次回の課題を確認した上で出席をとり、授業音声+パワーポイント（のちに動画に切り替えた）をオンデマンドで視聴してもらった上で当日中にコメントを書いてもらい（これも出席評価の一部とした）、提示した事前課題を次の授業の前日までに提出してもらい、教員自身はコメントと課題のチェックをしたうえで、課題の内容の解説を中心とした授業を事前録音（録画）して学内の教育コンテンツのポータルであるCLEの当該科目のところに録音とパワーポイント（あるいは動画のリンク）、コメント欄、事前課題の提出欄、その他関連資料を張り付けて次の授業に臨む、というサイクルを作って、それを最後まで続けた。個別にやり取りが必要な学生にはZoom会議終了後そのまま残ってもらい、懇談や質疑応答の時間をとった。事前課題を中心とした授業内容の構成やオンデマンドの録音（録画）授業を中心とした教員の授業提供方法は、特にオンライン環境が不安定な学生に対する配慮を前提としたものであった。

### 3.3. 教材の種類

では、授業で扱った材料はなんであったか。

この授業は、元々筆者の専門であるフィリピン・カトリック教会の公文書のフィリピン語版をひたすら講読する、というものであった。しかし、資料入手の利便性を考え、元々はオンライン上にない資料をコピーして使用する予定であったものを、類似のもので、オンライン上に公開されている公文書に切り替えた。

並行して筆者は、新聞のウェブ記事及びYouTubeやFacebookのラジオやテレビのニュース動画を通じてフィリピンの情勢を把握していく中で、授業中に時事的な材料をときどきはさみ始めたが、学生のレスポンスがよかったため、授業の内容も、次第にそちらに重点を移すようになった。

以下が使用した主なオンライン資料と資料状況である。

・フィリピン・カトリック司教協議会 司牧声明 『聖化への道 Landas ng Pagpapakabanal』西暦2000年を期して、教会の立場から、フィリピン人の宗教性について再吟味した公文書。数段落ごとに日本語訳をつける課題を出し、授業では講読・解説した。特に表現、用語、文法がフォーマルな文書でどのように実際に用いられるかに力点を置いて解説し、授業後のレスポンスでもその点に関する応答が多かった。またカトリック教会とフィリピン社会の関係、及びカトリック教理における世界観や問題意識について解説した。ただ、全体に学生たちにとっては難解であり、時事的な問題への関心が高い学生が多かったことも次第にわかったこともあり、授業は途中回から動画と交互に進め、最終的には動画メインとなった。

<http://cbcponline.net/pastoral-letter-on-filipino-spirituality/>

・GMA Public Affairs 公式YouTube『フィリピンのおいしいもの：カラ・ダビッド流とうもろこしスープの作り方 Pinas Sarap: Suam na mais recipe ala Kara David!』ロックダウン下のマニラでレポーターが自宅で作れるレシピを紹介。短い動画、かつ料理の様子が見える中で、視聴しての理解に基づいて内容を紹介する課題を出し、授業でフィリピン語の説明や文化の説明と共に解題。この授業でフィリピン料理への関心を呼び起こされ、以降積極的にこのシリーズの動画を見ている、という一学生からの反応があった。

<https://www.youtube.com/watch?v=jHNknG5vuu0>

・GMA News 公式YouTube『ニュース番組24時間(24 Oras Express: June 3, 2020)』ニュースに現れるキャプションを書き写して翻訳し、視聴で理解できる範囲でニュースの中身を紹介する、という課題を出した。授業ではニュースの内容、キャプションのフィリピン語の特徴、ニュースの社会背景を解説。これが学生たちに好評で、出題スタイルや課題内容を工夫しながら、これ以降も繰り返し同様の課題に取り組んでもらった。

<https://www.youtube.com/watch?v=hkHPz32aLL4>

・ラジオ局Wish 107.5のYouTube公式サイト『セゲラ、カバゴンが歌う「永遠の別れ」Ice Segueria, Noel Cabangon perform "Walang Hanggang Paalam" LIVE on Wish 107.5 Bus』フィリピンのポップスも扱ってほしい、という学生のリクエストに応え、数十年前の学生運動の背景を持ちながら、現在もカバーされ歌い継がれている名曲を、新しい字幕付きの動画で聴いた。事前課題で学生に訳と全体の意味の理解を考えてもらった。授業では歌における単語の省略や文法の簡略化、韻の踏み方、矛盾する語義をぶつける詩的な表現の文化やその社会的、文学的な含意を解説し、多くの学生は、フィリピン語の社会派の歌の世界観の深さと神秘性に強い印象を受けたとのレスポンスを提出した。

<https://youtu.be/hrVCqbHrenQ>

・GMA News公式YouTubeサイトから『本当かウソか:反テロ法はテロに反対するものか、批判に反対するものか Fact or Fake: Anti-Terror Act, kontra-terorismo o kontra-kritisismo?』ニュース番組を見ることが増えたこともあり、もう少し特定のニュースを深め、またテキストをきちんと見ることを兼ねて導入したのが、この字幕付きの動画だった。フィリピンの二大テレビ局の一つGMAの人気レポーターであるジョセフ・モロンの『本当かウソか』の動画は、新型コロナウイルス感染拡大によるロックダウンの導入とほぼ軌を一にして、字幕付きの動画として定期的に掲載されることとなった。モロンが事件や問題の複数の当事者にインタビューし、様々な論点を紹介する番組。学生たちは事前課題でテキストの翻訳と内容の理解、テキストのフィリピン語ないし英語の特徴について分析することを求められた。複数の論者の議論が交錯するインタビュー資料を読解するプロセスを解説し、卒業論文の準備に向けた演習として学生が積極的に取り組む様子が、提出された事前課題やレスポンスに伺われた。

<https://youtu.be/u-rbWj6KQ-M>

#### 3.4. 授業と課題とフィードバックの効果

効果の客観的な評価は難しい。ただ、課題及び授業に対するコメントの積極的な内容から、授業の一定程度の効果が伺われた。

第1に、フィリピンで実際に放送されたり読まれたりしている資料、また現在進行形で起こっている出来事のニュースによって、すでに学んだ教科書のフィリピン語の有効性と限界が実感されたことへの手ごたえを表明する学生の声がよく聞かれた。特に、特定の文法や語法が実際の文脈の中でダイナミックに表現力を示している事例が示され、取り組まれ、また授業で解説されることで、試行錯誤のあとに実際の用法が理解されていくプロセスを、オンラインの双方向性のある授業の中でたどった。その形の中で、学生一人一人が自身で資料や動画、音声に取り組むプロセスを教員もある程度たどることができ、より積極的な成績評価にもつながっていった。

第2に、フィリピン語と並行して学んできたフィリピン社会事情概論の知識を踏まえつつ、実際のニュースがそうした基本的な知識とどうつながって来るのか、またそうした予備知識が、フィリピン語を理解すること、またフィリピン語で理解することとどうつながるかを学生が試行錯誤し、そのプロセスを教員がたどりながら励ますことができた。これまでの教室において皆で視聴することにもメリットはあるとしても、一人一人が動画を、それぞれの意欲に基づいて、繰り返し、速度を変えたりしながら画像と共に視聴することで、言語から地域へと広がりを持つ理解を支援できたのではないかと考える。

第3に、フィリピン語による情報や資料の豊富さやその利用価値を、学生たちに周知することができたと考えている。3年生になると卒業論文に向けての準備が始まり、テーマやアプローチ、資料の存在の認識についての取り組みも始まる。特に新型コロナウイルス感染拡大の中で、留学や現地調査が事実上不可能になっている現状の中では特に、オンラインを活用した調査によって、現地調査、現地滞在をいくらかでも代替することを考えざるを得ない。これまでも英語によるフォーマルなウェブ資料はある程度豊富に存在してきたが、よりインフォーマルだが生活実感に近い現地語の資料については最近になって増えており、しかも音声や動画が多い。こうした資料を活用し、オンラインのフォーマットで丁寧にフォローアップしながら構成した授業の提供によって、いきなり接近するにはややハードルのある動画、音声資料を近づきやすくする成果があったと思われる。

### 終わりに

通常の授業のあり方が妨げられたことは、これまでルーティーンに依拠して避けてきた、オンラインでの授業への取り組みを強いるものであった。しかし教員と学生が有意義な大学の授業を共に作り上げるために意見交換しながら試行錯誤する中で、こうしたフォーマットの中で有効性を発揮する有用な教材の存在をより強く認識することができた。

今後の授業運営に関する環境がどのような制約の下に置かれるとしても、あるいはそうした事態が解消したあとでも、このようにして発見、開発された教材は、これからも改善しながら活用していくことになるであろう。